



改訂版

チャレンジアップシリーズ

国語総合問題

Ⅲ

現代文・古文・漢文

確認テスト 問題用紙

- ・先生から試験開始の合図があるまで、ページを開かないこと。
- ・問題は、現代文2問／古文1問／漢文1問の計4問ある。
 - p 2～p 3…現代文（評論）
 - p 4～p 5…現代文（小説）
 - p 6～p 7…古 文
 - p 8 …漢 文
- ・解答はすべて、別紙の解答用紙に記入すること。
- ・試験時間のめやすは40～50分であるが、時間は先生の指示に従うこと。



I 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本文化とは何か——。これは、明治維新以降、西欧とぶつかり合うなかで、彼我の^{*}違いを思い知らされてきた日本人の頭のなかに、絶えず浮かび上がった問いであったと思います。しかし、よく考えてみればこれは、実は日本というものができたときから常にあった問いです。近代以前の日本の場合、文明は常に大陸のある西からやって来るものだったので、「日本文化とは何か」という問いは、近代西欧と出会う以前から、すぐ西にある大陸（中国）や半島（朝鮮）を見つめ続けてきた日本が抱え込まざるを得なかった、必然的な問い^①です。

哲学、歴史学、芸術論、文学、地理学・地勢学、さらに文化人類学、比較文化論など、さまざまな角度からいろいろな日本文化論が提示されていますが、結論を言ってしまうえば、日本文化の性格を根本的なところで規定しているのは日本語です。文化や伝統はたえずそれを再生産することによって守られています。どこかの時代で途切れれば、文化や伝統は断絶します。日本の文化や伝統の源をつくり上げたのは日本語であり、またその日本語によって、日常不断に再生産されているものが、文化であり伝統です。漢字と平仮名と片仮名から成り立っている言語である日本語によって、また日本語の文字との関係に、日本文化は規定されています。

たとえば、「日本の四季」^{*}「花鳥風月」あるいは「雪月花」^{*}などと聞くと、なんとなくわれわれは安堵^{*あんど}した気分になります。広告文や雑誌の見出し、店の名前などにこれらの文字が絶えることがないと言っているほどです。これらの言葉を見たり聞いたりするだけで、自動的に納得してしまうようなところがあります。「春は花が咲き、夏は時鳥が鳴き、秋は紅葉が映え、月が冴え、冬にはあたり一面を純白の雪が覆う^②。ああ、なんと日本の四季は美しいだろう」というわけです。そう言えば鎌倉時代の僧・道元^{*どうげん}に「春は花、夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」という有名な和歌があります。

A 実際には多くの国に四季があり、同じように季節はうつろっています。したがって問題は、四季の有無ではなく、四季をどのように受け止めてきたかということです。

B 四季に対して、どのような言葉を使い、どのような表現をし、どのような文体を蓄積してきたかという、受け止め方の違いです。たとえば紅葉は美しいというけれども、それはわれわれが、「紅葉は美しい」という言葉とスタイルのなかに浸っているから美しいのであって、違う目で見ればやがて枯れ葉の山を築く赤い葉っぱに変わるといって、やっかいな現象にすぎないかもしれないのです。^②「カナダの黄紅葉は、日本の比ではないくらい美しい」とカナダへ旅行してきた人は言いますが、カナダ人が「カナダの四季は世界で最も美しい」と考えることは少ないようです。

このように考えると、日本の文化の型の一つとして、自然を賛美^③するという文化的性格があると言えます。そして、その性格は何によってもたらされ、また今なお守られているのかといえ、明らかに和歌です。古来、和歌は日本の春夏秋冬の美をうたいあげてきました。

そして、次第にわれわれはその和歌の表現に従ってものを見るようになっていきました。つまり、和歌の表現と文体を通じて、われわれは多くの美意識を形成したのです。それゆえ、四季は美しいと思うのです。

(注) 彼我＝彼と我。相手と自分。 花鳥風月＝自然の美しい風物。 雪月花＝雪と月と花。四季おりおりのよいながめ。

(石川九楊『日本語の手ざわり』)

安堵＝心が落ち着くこと。安心すること。 時鳥＝カヅコウ科の鳥。古来から日本の文学、特に和歌に現れる。

道元＝(一二〇〇年～一二五三年)鎌倉初期の禅僧。曹洞宗そうとうしゅうの開祖。スタイル＝型。

問 1 二重傍線部①～③の漢字の読みを平仮名で答えよ。

問 2 空欄 A・B に入る語として最も適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア そして イ たとえば ウ なぜなら エ しかし オ すなわち

問 3 傍線部①とあるが、なぜ「必然的」であると言えるのか。解答欄の形式に合わせて、本文中から二十三字で抜き出せ。

問 4 本文における「日本語」の説明として、あてはまらないものを次から一つ選べ。

ア 日本というものができたときから常にあったもの。

イ 日本文化の性格を根本的なところで規定しているもの。

ウ 日本の文化や伝統の源をつくり上げたもの。

エ 文化や伝統を日常不断に再生産しているもの。

オ 漢字と平仮名と片仮名から成り立っているもの。

問 5 傍線部②は何を例示している部分か。本文中の語句を用いて十字程度で答えよ。

問 6 傍線部③「四季は美しいと思うのです」とあるが、なぜ日本人はそう思うようになったのか。その理由として最も適当なものを次から選べ。

ア 日本では哲学、歴史学など、さまざまな角度から日本文化論が提示されてきたから。

イ 日本人は言葉を見たり聞いたりするだけで、自動的に納得してしまう性格を持つから。

ウ 日本の四季は、世界で最も美しいとされるカナダの四季よりもはるかに美しいから。

エ 日本の風土には他国にはない独自の自然があり、季節ごとに多様な美しさを見せるから。

オ 日本人は四季の美をうたいあげてきた和歌によって、多くの美意識を形成してきたから。

II 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

② 気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかしひどくよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲がっているせいもあって、白髭は歩く時も地に引きずっている。

相手は耳が聞こえないかも知れぬと、大声にあわただしく紀昌は来意を告げる。己が技のほどを見てもらいたい旨を述べると、あせり立った彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋の弓をはずして手に取った。そうして、石礪の矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群れに向かつて狙いを定める。弦に应じて、一箭たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切って落ちて来た。

ひととおりできるような、と老人が穏やかな微笑を含んで言う。だが、それは所詮射之射(ア)くせんしゃのしやというものの、好漢いまだ不射之射(ふしゃのしや)を知らぬと見える。ムツとした紀昌を導いて、老隠者は、そこから二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れて来る。脚下は文字どおりの屏風(びやうぶ)のごとき壁立千仞(せん)、はるか真下に糸のような細さに見える溪流(けいりゅう)をちよつとのぞいただけでたちまち眩暈(めまい)を感じるほどの高さである。その断崖(だんがい)から半ば宙に乗り出した危石の上につかつかと老人は駆け上り、振り返つて紀昌に言う。どうじゃ。この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。いまさら引つ込みもならぬ。老人と入れ代わりに紀昌がその石をふんだ時、石はかすかにグラリと揺らいだ。強いて気を励まして矢をつがえようとすると、ちようど崖(がけ)の端から小石が一つ転がり落ちた。その行方を目で追うた時、覚えぬ紀昌は石上に伏した。脚はワナワナとふるえ、汗は流れて踵(かかと)にまで至つた。老人が笑いながら手を差し伸べて彼を石から下ろし、みずから代わつてこれに乗ると、では射というものをお目にかけようかな、と言つた。まだ動悸(どうき)がおさまらず、蒼ざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに気がついて言つた。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手だったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢のいるうちはまだ射之射じゃ。不射之射には、烏漆(うしつ)の弓も肅慎(しゅくしん)の矢もいらぬ。

ちやうど彼らの真上、空のきわめて高い所を一羽の鳶とびがゆうゆうと輪えがを画えがいていた。その胡麻粒ごまつぶほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅*かんらんが、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引き絞つてひょうと放てば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。

紀昌は慄然りっぜんとした。今にしてはじめて芸道の深淵をのぞき得た心地であつた。

(中島敦『名人伝』)

(注) 紀昌はこの物語の主人公。弓の名人を目指している。

白髯 〓 白いほおひげ。

楊幹麻筋の弓Ⅱ柳の幹を麻糸で巻いた強い弓。

石礪の矢＝石碑をも貫くような鋭い矢。 一箭＝一本の矢。 壁立千仞＝壁のように険しく、非常に深い谷間。
 烏漆の弓＝真っ黒に漆を塗った弓。 肅慎の矢＝古代中国北方の肅慎国が貢ぎ物にした矢。 甘蠅＝この場面に登場する老人の名。

問1 波線部①「所詮」・①「覚えず」の本文中における語句の意味として、最も適当なものをそれぞれ次から選べ。

- (ア) ア 元のまま イ 以前と同様 ウ 結果として エ 最後まで オ 今少しのところ
- (イ) ア 自分で意識しないですようす イ 物事にこだわらないようす ウ 配慮がかけていること
- エ 不注意でぼんやりしているようす オ 期待しないこと

問2 波線部①について、このような「爺さん」のイメージ（人物像）が変化するのはどこからか。イメージが変化する文の最初の五字を抜き出せ。

問3 波線部②と言ったときの紀昌の気持ちとして、最も適当なものを次から選べ。

- ア 自分に才能があるかどうかからなので、高名な先生に判定してもらうために見てもらいたい。
- イ 自分の才能にも技にも強い自信があり、自分よりできる者はいないことを示すために見てもらいたい。
- ウ 自分の技に強い自信はあるが、高名な先生と比べるとかわからないので見てもらいたい。
- エ 自分の技に強い自信があり、それを高名な先生に認めてもらうために見てもらいたい。
- オ 自分の技に全く自信がないので恥づかしいが、教えるこうために見てもらいたい。

問4 本文の一番の山場（盛り上がったところ）はどこか。一文の最初の五字を抜き出して示せ。

問5 波線部③「芸道の深淵」とあるが、具体的にはどういうことか。本文中の語句を用いて二十字以内で説明せよ。

問6 紀昌の弓の技と老人の弓の技の違いを表した言葉をそれぞれ五字以内で抜き出し、その内容をそれぞれ十字以内で説明せよ。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A 春すぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山
持統天皇

新古今集にもこの百人一首にも、衣干すてふと書かれたるは不審なる事なり。すべて歌の言葉にてふといふは、といふといふ言葉をつづめたるものにて、恋をするといふ事を恋すてふといへるがごとし。しかればこの御製に眼前衣の干してある事を、衣干すてふと詠ませ給ふべきにあらず。この故に百人一首の諸家の註釈、いづれもこの歌の解に様々のむづかしき説どもをつけながら、明らかに解き得たるも見えず。ここに一つの考へあり。後京極摂政良経公の月清集に、院の第二度の百首とてあり。その冬の歌のうちに、

B 雲晴るる雪の光や白妙の衣干すてふ天の香具山

と詠まれたり。この後京極殿は定家卿と同じ時代の人なるに、我が歌に持統天皇の御製を三句ながらそのままにて盗み詠み給ふべきにあらず。この後京極殿の歌の心は、かの万葉集にある持統帝の御製の、衣さらせり天の香具山と詠ませ給へるは夏の初めの景色なるを、今雲の晴れたる後の雪の光の真白に見ゆるにつけて、昔持統帝の衣さらせりと宣ひし天の香具山の景色も、かやうにありたるにやと思ひ合はせて詠まれたるなり。干すもさらすも同じ心なれば、これにて、よく聞こゆるなり。されば新古今にもこの百人一首にも、後京極殿の歌と持統帝の御製とを一つに混じて、書き伝へたるものなるべく思はるるなり。

(尾崎雅嘉『百人一首一夕話』)

(注) 持統天皇Ⅱ第四十一代天皇。天智天皇の皇女で、天武天皇の皇后。御製Ⅱ天皇や皇族が作った詩文や和歌などのこと。

後京極摂政良経公Ⅱ藤原良経。藤原俊成・定家を後援し、新古今調樹立の基礎を築く。

月清集Ⅱ『秋篠月清集』。藤原良経自撰。六家集の一つ。院Ⅱ後白河院。

問 1 二重傍線部①～③の「にて」について、(例)にならって文法的に説明せよ。

(例) さやうのもの、なくてはありなむ。↓完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」、推量の助動詞「む」の終止形「む」

問 2 波線部(ア)「不審なる事」、(イ)「よく聞こゆるなり」の本文中での意味として、最も適当なものをそれぞれ次から選べ。

- (ア) ア さまざまに考えること イ 勢いがふるわないこと ウ 誠実さがなくこと エ 心を悩ますこと
オ 疑わしいこと

- (イ) ア よく光景を想像できるものである イ よく世間に伝えられているのである ウ よく納得がいくのである
エ よくできた歌なのである オ よく誤解する者がいるのである

問 3 傍線部①「衣干すてふと詠ませ給ふべきにあらず」とあるが、その理由を簡潔に述べよ。

問 4 傍線部②「一つの考へ」の結論が示されている一文の最初の六字を抜き出せ。

問 5 傍線部③「盗み詠み給ふべきにあらず」について、

- (1) 主語を明らかにして口語訳せよ。
(2) Bの和歌のどの部分について言ったことか。該当箇所をそのまま抜き出せ。

問 6 本文の内容に合致するものを次から一つ選べ。

ア 万葉集に持統天皇の歌を「衣さらせり」と記しているのは、他の歌と混ざった結果である。

イ 「衣干すてふ」も「衣さらせり」も意味が同じなので、どちらにしてもよい。

ウ 新古今和歌集や百人一首の持統天皇の歌が「衣干すてふ」とあるのは、他の歌と混ざった結果である。

エ Bの和歌は、Aの和歌と同じ場所で同じ季節を詠んでいる。

オ Bの和歌は、新古今和歌集の持統天皇の歌を念頭に置いて作られている。

IV 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

初^メ李^リ夫人^{フじん}病^{アハレ}篤^{アツク}。上^{アガリ}自^{ミヅカ}臨^{ミテ}候^{コト}之^ノ。夫^ハ人^ニ蒙^{カウ}レ被^レ謝^{シテ}曰^{ハク}、妾^{セメ}久^{シク}寢^ネ病^ニ形^{けい}貌^{ぼう}毀^キ壊^{クワイ}、不^レ可^{カラ}以^テ見^ミ帝^ニ。願^{ハク}以^ニ王^ヲ及^ビ兄^ヲ弟^ヲ一^ニ為^{サント}レ託^{スル}上^ニ曰^{ハク}、夫人^ハ病^{ムコト}甚^{ダシク}、殆^{ほとん}將^レ不^ラ起^キ。一^{タビ}見^レ我^ヲ、属^{しよく}コ託^{タカセバ}王^ニ及^ビ兄^ヲ弟^ヲ、豈^ニ不^レ快^{こころよカラ}哉^{ヤト}。夫^ハ人^ハ曰^{ハク}、婦^{メタダ}人^ハ貌^ハ不^{ンバ}修^セ飾^シ、不^レ見^ユ君^ニ父^ニ。妾^ニ不^ト敢^{ヘテ}以^ニ燕^{キエン}嬙^{ダラ}一^ニ見^ユ帝^ニ。上^{ハク}曰^{ハク}、夫^ハ人^ハ弟^ニ一^{タビ}見^レ我^ヲ、將^ト加^{ヘテ}賜^シ千^ヲ金^ニ而^ニ予^{あたヘント}兄^ニ弟^ニ尊^ヲ官^ニ。夫^ハ人^ハ曰^{ハク}、尊^ハ官^ハ在^レ帝^ニ、不^レ在^ニ一^ニ見^ニ上^ニ復^タ言^フ欲^{スト}必^ズ見^{ント}之^ヲ。夫^ハ人^ハ遂^ニ轉^キ郷^シ歔^{キキョ}歔^{キンテ}而^ニ不^レ復^タ言^ハ。於^{イデ}是^ニ上^ニ不^レ説^{シテ}而^ニ起^{タテリ}。

(班固『漢書』)

(注)

李夫人 前漢の武帝(在位紀元前一四一〜紀元前八七)の側室。

上 天子。ここでは武帝のこと。候 見舞う。機嫌を伺う。

被 布団。毀壊 瘦せほそる。やつれ果てる。

王 武帝との間に生まれた昌邑王のこと。

君父 君主と父。

燕嬙 だらしないこと。弟 ただ。「直」に同じ。

賜 目上の者が目下の者に物を与えること。

転郷 向きを変える。向こうむきになる。歔歔 すすり泣く。

問1 二重傍線部①「自」、②「遂」について、ここでの意味をそれぞれ答えよ。

問2 二重傍線部③「於是」の読みを送り仮名も含めて、平仮名で答えよ。

問3 傍線部①「願以王及兄弟為託」、②「豈不快哉」について、それぞれ書き下し文に直せ。

問4 傍線部③「妾不敢以燕嬙見帝」について、(1)書き下し文に直せ。(2)口語訳せよ。

問5 傍線部④「不復言」について、何を「不復言」なのか。その内容を整理して二つ答えよ。